

護念証誠

証誠

「諸仏の護念証誠は 悲願成就のゆへなれば

金剛心をゑんひとは 禰陀の大神報ずべし」

護念証誠ということは、仏教においては極めて大切なことであります。十方世界の無量の諸仏は、念仏の行者を護念証誠して下さるのであります。

護念と言うことは、覆護加念の略で、諸仏が念力をもつて念仏の行者を覆い護りたもうことであり、証誠と言うことは、証明誠実の略で、本願の真実なることを、誠実の言をもつて証明したもうことであります。

人は必ず、自らの心念、行動に対して、他の賛同を求め、同意を求め、更にその証明を求めるものであります。人間の理智が自らの信ずる所に向つて行つてゆくのはありますが、しかしそれは、他の多くの人の承認を求め、賛成を求め、更に証明を要求しつつ、生きてゆくのであります。

こうした人間性は、それあるが故に、苦しみ悩み、時に墮落するのでもありますが、しかしそれあるが故に、よく向上するのでもあり、救われるのでもあります。真実は、真実これを証明し、虚偽は、虚偽その味方となります。釈尊も誰にも彼にも味方せられたのではなく、悪党も必ずその友を持つのであります。でありますから、証誠の問題こそは人間の生活の機微に触れたものであり、人間の持つ社会性が深められることにより展開することによつて救われるのであります。

諸仏の証誠

『阿弥陀経』には、

「舍利弗、我れ今諸仏の不可思議功德を称讃するが如く、彼の諸仏等も亦、我が不可思議功德を称説して是の言を作く、釈迦牟尼仏能く甚難希有の事を為して、能く娑婆国土の五濁悪世、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の中において、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の為に、是の一切世間難信の法を説く、是を甚だ難と為す。」

とあります。阿弥陀経は、六方恒沙の諸仏が、念仏の真実なることを証誠せられることが説かれる経であります。釈尊は十方恒沙の諸仏が、誠実の言をもつて、広長の舌相を出して、この念仏の説かれる経を信じよとお説きになることを讃嘆せられました。しかるに諸仏もまた釈迦牟尼仏を讃嘆せられるのであります。

「釈迦牟尼仏は能く甚だ難く希有なることを為したまい、五濁悪世の娑婆国土において、正覚を成就し、諸の衆生の為に、この世間に信じ難き本願の名号をお説きになる、これは難中の難事である。」

と、諸仏は悉く釈尊を証誠護念せられるのであります。釈尊の説きたもう、弥陀本願の名号は、恒沙の諸仏によつて証誠せられる普遍真実の大法であります。仏は真実そのものであります。一仏の真実は一切仏の真実であり、一仏の大法は一切仏の大法であります。もし一仏の説法にして一切仏の説法でないならば、それは、

仏の説法ではありません。でありますから、一仏の説法は一切恒沙の仏が証明せられるのであります。

法蔵の本願

法蔵菩薩は四十八願を建てられるに当って、第十七願に、

「設ひ我仏を得たらんに、十方世界の無量諸仏、悉く咨嗟して我が名を称せずば正覚を取らじ。」

と、いわゆる諸仏称揚の願をお建てになりました。これ菩薩の正覚は、諸仏の讃嘆なくしては成就しないためであり、本願の成就によつてのみ諸仏は名号を讃嘆し、証誠するが故であります。それ故に諸仏はまた諸仏たり得るのであります。まことに恒沙の諸仏は如来第十七願によつて生れ、本願に同じて如来の名号を称し、咨嗟して、念仏をして法界に具体的ならしめ、名号を成就したもうのであります。

弥陀の大恩

「諸仏の護念証誠は 悲願成就のゆへなれば

金剛心を忍んひとは 彌陀の大恩報ずべし。」

一切衆生が本願を信じ、名号を称えることによつて、名号は成就するのではなくて、諸仏の上に成就されたる名号を聞いて信ずるのであります。

我らが名号を信ずるのは、名号が諸仏によつて証誠せられるが故であります。恒沙の諸仏によつて証明せられずして、どうして衆生が名号を信じましょう。また諸仏によつて証明せられないものを信じてはならないのであります。されば聖人も、『唯信抄文意』に、

「凡そ十方世界にあまねくひろまることは、法蔵菩薩の四十八の大願の中に、第十七願に十方無量の諸仏に、我名をほめられんと誓ひたまへる、一乗大智海の誓願を成就したまへるによりてなり。阿弥陀経の証誠護念のありさまにてあきらかなり。」

と仰せられました。まことに衆生が金剛の信心を獲得するのは、諸仏の護念証誠あるがためであります。しかしながら、諸仏の護念証誠は、如来第十七願に基因するのでありますから、和讃に「金剛心を忍んひとは彌陀の大恩報ずべし。」と仰せられるのであります。

名号の真実を、真実の言によつて証明したもう諸仏は、やがて念仏の子を護念したもうのであります。念仏の行者こそは、如来本願の真実によつて、真実信心をその生命とするものであります。この信心は恒沙の諸仏の真意であるが故に、諸仏はよろこんで護念したもうのであります。まことに念仏行者は、諸仏の護念証誠によつてのみ、不退転の行者たり得るのであります。しかもそれは、第十七願成就せるが為であるが故に、弥陀の大恩報ずべきであります。

凡夫の顛倒

念仏申しつつも、依然として迷妄いよいよ深きことではありますが、しかし念仏申さぬ日の愚かなる大胆を身ぶるいせずにはいられません。真実のみ法を求めようともせず、ただ迷妄深き我慢我執を通そうとして、自分をほめ、自分を承認し、自分に都合よくしてくれる者ならば、相手がどんな者であろうとも、善い人に見え、それに頼ろうとし、もし自分を認めず、非難し、叱責する者は、いかなる人であろうとも悪く見えて、心次第では、朝の善人も夕べは悪人となり、昨日の善知識も今日は悪魔と見えるのであります。

こうした歩みは、一貫した何もものもなく、好むにまかせて右左、後先きにふらふらして、六道輪廻するものであります。六道輪廻するものには、問題はただ、名利の満足、幸福のあるなし、苦楽如何のみであります。ただ、己のそうしたものの滅びることのみを唯一の恐れとします。

眞の畏れと歎び

しかし念仏の子は、ほのかに、何を畏れ、何を問題とすべきかを知らされず。

念仏の子の上にもさまざまな風が吹き、火の粉が降ります。しかし念仏の子にとつては、雨よりも風よりも、絶対の権威をもつてせまつて来るものは、如来聖人のみ教えであります。見たことも会ったこともない世間の人のおほめよりも、大法一句の叱責の方が問題であります。世間千万人に認められるよりも、唯一の師教こそ千万金の重さであります。

我らは、恒沙の諸仏の証誠護念を求むる前に、如来聖人のみ教えに忠実であり、その証誠護念を頂かなくてはなりません。仏祖善知識は、如来本願海に応現あらわれたもうた方であつて、諸仏の護念証誠によつて大法を説きたもうのであります。でありますから、そのみ教えに信順することは、そのままその護念証誠に生かされることであり、恒沙の諸仏の御冥見にかない、御冥慮をこうむり、護念証誠に生かされるゆえんであります。

大地の上になされる裁判は時に甚だしくまちがっています。古今の多くの聖賢は、このまちがった裁判によつて、あるいは殺され、あるいは流されて、一見悲惨な生涯を終られました。しかしその歩みは尊くも一貫していました。そしてその内面には不滅の感謝と歓喜が光り輝いておりました。これ、聖賢は皆、世尊の教えに忠実であり、恒沙の護念証誠に生きたもうが故であります。私はこの頃、ことの外、この護念証誠の世界の尊さを憶念しています。有り難いことであります。